

* 青山学院大学

白い香水

米本樹奈

目の前のとんかつ定食に白い香水をふりかけた
香水の瓶から白が白が白が出て とんかつに 味噌汁に 白米に ふりかかっ
た

とんかつが白くなった

味噌汁が白くなった

白米がなんだか白くなった

白に塗られたとんかつ定食を いただきますと手を合わせて私は食べた

美味しかった

とても美味しかった

テーブルに先週撮った写真を広げた 白い香水をふりまいた

星空や

草花や

マフラーやカーテンや電線が

白く白く白く白く白く白く白く白く

私は写真を見て微笑んだ

綺麗だった

美しかった

私は 私の手首に私の胸に私の足に 白い香水をつけた

香水は霧になって舞った

私は白くなる

白くなり白くなり白くなり白くなる

一体誰が私の色をわかるだろう

私は私のおいを嗅ぐ

とてもとてもとても いいにおいだ

炊飯器から香る匂い、変じゃない？
暑さに犯された匂いだけは分かる鼻

部屋の黒い壁に映る手の影でひとり遊び
もうこんな時間だよって知らせてくれるのは
冬物のコートが掛けられている頭上だけ

河童

丸岡雅弘

悪いことなんてひとつもしてないよ
ちよつと周りが気になっただけさ

イタズラだってそんなにしてないよ
みんなの気を引きたかっただけさ

人間の世界のことはよく知らないよ
でもなんだかみんな怒りっぽいみたいだ

縄で縛られてポカポカ殴られて
それでもおいら、みんなと仲良くなりたいだけなんだ

ああ、今日は風を見送りました
みんなあの雲に乗って、どこへ行くのでしょうか

ああ、今日は風を見送りました
目を閉じれば、おいらの思いも届くのでしょうか

どの町にも仲間がいたのですが
今ではすっかり姿を見なくなりました

おいらを殴っていた人たちも
みんなすっかり姿を見なくなりました

あそこの沼も町になって

誰もおいらの姿が見えていないかもです

いじめられてた方が寂しくなかった

忘れられると体が透明になるようです

ああ、今日は風を見送りました

みんなあの雲に乗って、どこへ行くのでしょうか

ああ、今日は風を見送りました

目を閉じれば、おいらの思いも届くのでしょうか

ママは「最近やけに暑いわね」と言って、首元にタオルを当てがった。本当に暑かったのである。

パパは「そうだな」と小さく呟いた。パパはママの首元の蚊に刺されを、不倫の印だと思って、勘ぐった「そうだな」を言ったつもりだった。「あいつは今、その首元をタオルで隠したんだ」

犬は心人に向かって「ワン！」と吠える。(母さん、水受けが空っぽだ)

ママは「はいはい、お散歩ね。でもちょっと待って」といって犬を撫でる。別にちよつと待つこともなかったのだが、そう言う方が雰囲気が出るかなと思っただけだった。

(ここでインターホン)

「あら」

ママが急いで玄関口に向かうと、パパは「いい、俺が行くよ」と言った。何の根拠もなかったが、今ドアの先にいる郵便配達員が、ママの不倫相手だと思っただからである。ママは「ありがとう」と言って微笑んだ。

「こちらに印鑑を」「どうも」

パパは郵便配達員を眺める。上から下まで。何か残穢が残っているような気がして、眺める。

郵便配達員はそれに気づいたが声はかけない。(もしかしてこの人ゲイなのかな?)

郵便配達員はゲイだった。根拠のない勘だが、そういう勘の世界なのだ、僕たちの生きる世界って。ここで声をかけるべきだったかもしれない。しかし郵便配達員は今日の夜、予定があった。ボーイフレンドと会う予定が。

「じゃあどうも」

郵便配達員は去っていく。今日は定時に帰らないといけない。

パパは荷物を持ってリビングにやって来る。「これ、お前の荷物だぞ」（やっばりあの男、ママの不倫相手だ）

「ありがとう」私はそうして荷物を受け取った。小さい段ボール箱だ。割れ物注意のシール。

私はこの荷物の中身を知っている。洋服なんかじゃない。化粧品でも、可愛いぬいぐるみでもない。小さい命だ。ボロボロで今にも死にそうな、小さい命。私は自室へ向かう。そうしてこの箱を開けるのだ。ゆっくと、覗き込むように。

誰にもバレないように。

群れ

小林大輝

鳥の群れが川の向こうで集まっている
その首をのばした野生性
しなやかに大きな空を仰いで
飛べると信じているのだ
賢くて野蠻な生き物の意志
近づく人間には目もくれない
ただ夏の風に毛色が揺れて
ゆつくりとまた首をのばす
今にも飛びそうな鳥の群れ
私は川のこちら側
つまらない野辺で
優しさについて滔滔と語り
古ぼけたボックスと
もはや色さえ失った命脈を
まだ大事に抱えている
弾けないギターと背もたれの大きな木の椅子を持って
どこかで歌い続けていたい
河川敷にまた風が吹く
つまらない野辺で
芥川と太宰の白い手が
おいでおいでと手招きをする
汗ばんだスーツとお守り付きの鞆で鈍重な私と
今や飛び立つ鳥の群れ

12 ダースの My Dream

蛇草みつき

私のサンクチュアリが
海に飲み込まれていく
天変地異なんて起こる訳ないと
信じてきたけれど
目の前に広がるのは
まるで寓意画のような暗黒郷

せめてもの饑になれ
赤い薔薇の花一輪
手向けて
名も無い偶像
追いかける

走れ、走れ
天使の囁きに
翻弄された私は
黒曜石の闇に堕ちていく

走れ、走れ
ゆらゆらと
闇夜を舞う胡蝶

色褪せた青い薔薇の花が
一輪密かに咲いていた

日の入り

谷内柊太

水平線に太陽が沈む

いつもの見慣れた光景だったのに

今日は地球最後の日 もう夜明けはない

どこにも逃げ場はないのに飛行機雲

一人の男が死んだカフェを通りかかって

喘息持ちのあの子はきつと誰かの腕の中だ

潮風が運んできた幾重にも重なるあの日

諦めて煙草に火をつける

この砂は夕日の熱にまだ輝く

夜の語らい 休講の昼下がり

電話越しの詩 魂が溶け込んだ電子

もっと輝け、この夜を裂け

いつもの散歩道 街灯に照らされて

錆びついた「また来てね」の看板

意味が崩壊しかかったこの惑星で

月が最後の仕事に取り掛かる

蘇生

梶田星良

閉ざされ朽ち果てし園
幻影のごとき、往時の面影をたどる
呼吸を忘れた時

澄み渡る空から降り注ぐ慈愛
化学物質に蝕まれた荒廃を照らし
細かな隙間にも入り込む

凍てつく風に震える木々に
脆く白い骸はまた緑に満ちる夢を
幾度の冬が来るたびに見るだろう

色褪せた黄色のバンパーカーのボンネット
蔦と雑草が抱擁し合い
棘だらけのもつれが何とか形を保っている

巨大な観覧車は一度、二度、
軋み、高くそびえるが、空虚のまま
鉄の嘆きがかつての生命の香りを宿す

“The Awakening”

Somewhere in an abandoned city in a place
rendered nothing but an echo of what it used to be,

time stands still.

Sunlight pouring down clear skies
illuminating the ruination that chemicals had left behind,
trickling into every crack.

Trees stand trembling in the icy wind
fragile white skeletons dream of being whole and green,
will dream it for dozens of winters to come.

In and across the hoods of faded yellow bumper cars
vines and weeds meet in an embrace,
a thorny tangle barely holding the structure.

A giant of a Ferris wheel creaks once, twice, or
it stands tall, but it stands empty,
strength and durability are nothing when you are empty.

*法政大学

体積

山本瞳

そのライダーはただのライダーだった
仮面を盗まれたライダー

喪失は犬となり

私の膝の上で眠っていた

犬ぶんの寂しさ

ポケットを裏返した

飴玉は宇宙に

地球はポケットにすっぽり入った

ポケットは闇夜に照らされた

私は仮面を探して、歩いた

いつしか犬は私よりおおきかった

あたたかでふわふわのパルテノン神殿

柱は4本

雨宿りの機能はない

仮面は盗まれたままだった

たくさんのが盗まれた

やがて世界中からすべてが盗まれたので

地球の味がなくなった

ガムは捨てられた

私は犬と歩いていた

クラクラ・ラララ

岩野彩音

うるさいのよ

騒ぎ立てないで

ノックしないで

ねえ亡霊

お前は死んだの

死んだのよ

一寸先で踊った

つま先で描く嘘のせいで

ねえ亡霊

ノックしないで

私、知らないままでもいいの

喫茶店で食べた

プリン・ア・ラ・モード

夢見心地のまま腐っている

ララ・ララ

くらくらしちゃうわね

吐き気がするほどの甘ったるさ

ララ・ララ

花瓶を割る

絨毯に阻まれた音は

なんの役にも立ちほしない

ララ・ラ

ノックの音を掻き消すように

いつか聞いた歌のフレーズ

ラ ララ

もう何も考えたくないの

割れた花瓶から溢れた水が

絨毯に染み込んでいく

腐り落ちた手で耳を塞いだ

ララ

のぼり44 匹目

夕楽蝶

雨がしとしと月曜日

ほら穴奥からひぱひぱと

アスファルト、はねる雨音ちよちよと

穴の中には誰がいる

光る眼の誰かいる

鉄輪響く、ききよききよ現るおおきな茶色

雨の日しとしと月曜日

伸びてく伸びてくその身体

脇目も降らずに屋根ある場所へ

雨雨蒸し蒸し雨の中

五分遅れて到着だ。

猫にあげたい

高橋梨咲

猫にあげたい

魚の煮付けの残りを 三角コーナーに捨てるのではなく 猫にあげたい

骨が厄介だ にんげんの背骨のように一本太くある骨 かたくて食べられない
口の中に入ったら 骨をイフシ 面倒くさがる わたしの背骨は明確に曲がっ
ている

ユニクロの服を古着屋に売ること獲得したこの空間を 猫にあげたい ユニ
クロは嫌いだという事にわたしは気づけなかった

大学の近くのローソン いらっしやいませ こんにちは 一点ですね Pay
Payですね ありがとうございます せっかくおぼえた日本語が気持ち悪
く聞こえてしまつて申し訳なかった

猫にあげたい

5センチの前髪を ゴミ袋に捨てるのではなく 猫にあげたい

猫にあげたい

面接官の女のひとのマイクがオフになっていた2秒間を 猫にあげたい

猫にあげたい

タンフルを噛んだときのカリツとした音を猫にあげたい 犬歯が活躍する

漢江の上にあった灰色の空の向こうの江南のビルをぼーっと見つめたとき
にうまれる頭のふらふらした感じは猫にあげられるかはわからない

わたしは彼（ら）の良識のおかげで息をする、私は彼（ら）の良識のおかげで
眠り、起きることができる

猫にあげたい

わたしが今していることに対する気持ちのもろもろを

猫

糸引雨

長崎和登

さようならを最後に言った日が
遠ければ遠いほど
寂しくはないらしい

桜流し

はねた前髪が司っていたのかもしれない
尊い終幕

東京では

電車が止まるくらい当たり前に

五月雨は降り

とうとうと

特に意味もない歌が流れる

街角で

前髪に梅雨

いつだっただろうか

さようならを最後に言ったのは

今さら

見直ししろよと伝えていたなら

今になって

もっと悲しむべきだったと

後ろ髪を引かれる

笑顔のままの幕引きはない

窓から引きで見る

雨の止まる衝突音

温度が引いていく

コンビニでヘアワックスを買う
信号のある交差点を渡って帰る
さようなら

人間

新井野々花（上智大学）

目が覚めてゴジラだったらとても気分が良いだろう

この東京を、ビル群を、住宅街を、学校を、この世のすべてを壊すんだ

何もかも、この両足で踏み潰し、口からは放射線を吐き、誰ひとり残すことなく焼き尽くしてみせるんだ

私の歌は咆哮となり皆の鼓膜を破るだろうか

満員電車、リーガルシューズが私のスニーカーを踏む

窓の外、小さな家やマンションのひとつひとつに人間と生活やらがあるらしい

影ひとつ落ちる暗い道、カレーの匂いの住宅街

人々は 誰が死んだら悲しんで 静かな夜に 誰の帰りを待つのだろうか

ゴジラになった私のことは、誰もが殺したがるだろう

誰が私の死を悼むだろう

ああ、目が覚めてゴジラだったらとても気分が良いだろう

陽向のバレエ

大類環

肌にはなにも触れていない
彼女の身は余分な布を纏わない

なめらかな臍の窪みに

冷気が入りこまないように

腹部 その上だけにお祈り程度の
軽いヴェールを巻き付けている

ゆきすぎたほんの少しの圧力も

その自然の大きさから

どれほど凹ませることのないように

ほんの一寸の緩まりで

彼女のからだからはらりと離れてしまわぬように
バランスのとれたリボンの結びで

皮膚に注ぐのは陽のひかりと

彼女を何度も

かるくあくまでもずっと愉快に攫っていかうとする風のたわむれだ

陽の光に乾いていく

彼女のしずかな湿り気は

ぴんと皺のないシーツの清潔を
からだの表面に掛けてゆく

アイロンをゆっくり

けれども焦がし付けないように

シャツをまっすぐに伸ばしてゆくように

しっとり凹凸膨らむ彼女の皮膚を

太陽の零す光の粒粒はもてあそぶように

きらきらひかる

追っては追われては

彼女も光をもてあそぶ

指先のおしゃまなくねりて

肩の曲線のどっしりと落ちてゆく幹で

露出したたおやかな皮膚は

呼吸をするたび膨れてはへこみ

影ができては光をつくり

幾度も静止することはない

貴方をカメラで撮ろうとしたら

その画面はどこかがかならずブレている

均等な静止をすることができない

そのことがただほんとうに

貴方と貴方の世界を映した

そう言えることになるのだろう

その皮膚はくびれは誰の手にも触れられるためになく

ゆっくりとでもどれだけ時間がかかっても

どんなに大きな手を持った

王さまの指圧をもはね返すだろう

そこに横たえられた裸は
風と火と花と この大きな星にのみ
差し出されたからだ

答えるように地面が大きくあくびをする
血のとどいた枝葉がふるえ
鳥がぱつ と羽をはばたく
彼女はそそのふるえに気がつく
ちいさく右のこめかみが痛む
指で鎮めればまた陽がのぼる